

ヒラメ放流技術開発調査事業（要約）

増養殖対策科 石 井 功

当事業報告書は別途「平成10年度ヒラメ放流技術開発調査事業報告書 H10年3月 高知県他」として既刊されているのでここでは要約とする。

1 飼い付け手法の開発

開放型築堤式飼い付け施設にて5月21日～6月28日の間、配合飼料を給餌して全長61mmサイズのヒラメ稚魚17,800尾を飼い付けした。施設での稚魚の分散状況は細砂の着底床と南側水門壁に続く細砂の底質部には10尾/㎡以上と他の分布域に比べ密度では倍以上の分布であった。施設からの稚魚の逸散状況は、飼い付け一週間目までに1/2の魚が、その後残りの魚は35日目までに順次逸散し浦ノ内湾に出ていった。稚魚の成長は採捕漁具や場所によるサンプリング方法によりバラツキがあるが施設逸散前の6月25日には全長72mm群に成長していた。

2 施設外での放流魚の追跡

施設から逸散後各種漁具で追跡したが14日目に天皇州、施設地先等で全長65～100mmの稚魚11尾が採捕され浦ノ内湾へと分散していったものと思われる。

3. 餌料生物調査

施設内外でソリネット調査を実施した。ヒラメ餌料として施設内ではヨコエビ、エビ類が0.09尾/㎡、施設外ではキシユメエビが7尾/㎡確認された。この他の餌料として施設内外には稚魚類もいるが量的な検討も必要と思われる。

4 食害生物調査

施設内外で各種漁具を使用し調査した。食害種として考えられるものに施設内ではカニ類(6.9～191g/尾)の2,340gや友食い現象と思われるヒラメ、

施設外ではシマイサギ、イシモチ、コチ、エソ等がみられた。このうち被食生物(ヒラメ)がみられたのはヒラメで全長121mmのものが0.89gの稚魚を摂餌していた。検討事項としては刺し網調査では夜間となるが引き上げ時間等の工夫が必要と思われる。

5 標識試験

全長61mmのヒラメ20,000尾の背鰭後端にパンチング方式の標識を実施し、その後一部を飼育して再生状況を検討した。2ヶ月後の再生率は24%で識別可能な割合は63%となった。

また人工生産したヒラメ1才魚($\overline{BW}$ 265g)、2才魚($\overline{BW}$ 489g)の移動範囲をみるためアンカータグ標識をして、水試地先403尾と宇佐地先に185尾それぞれ放流した。再捕は放流後3～297日間に放流地点より1～80kmの範囲で35尾(6%)再捕された。再捕水深を見ると1～80mの範囲であった。

6 標本船による効果調査

放流場所近在の宇佐、深浦両漁協にて放流効果を調査した。両地区での水揚げ魚は27～67cmサイズが10～12月の間揚がり、そのうち放流魚と思われる色素異常魚は37～42cmサイズで5尾みられた。このうち今年放流した鱈パンチング標識魚はみられなかった。両地区とも刺し網を主漁法にしており全長25～55cmサイズの1～2才魚を主に採捕しているためと思われた。